

七星のスバル

[July 2018](#) (6)
[June 2018](#) (9)
[May 2018](#) (7)
[April 2018](#) (6)
[March 2018](#) (17)
[February 2018](#) (6)
[January 2018](#) (6)
[December 2017](#) (4)
[November 2017](#) (7)
[October 2017](#) (6)
[September 2017](#) (4)
[August 2017](#) (6)
[July 2017](#) (7)
[June 2017](#) (5)
[May 2017](#) (7)
[April 2017](#) (6)
[March 2017](#) (5)
[February 2017](#) (5)
[January 2017](#) (9)
[December 2016](#) (6)
[November 2016](#) (6)
[October 2016](#) (8)
[September 2016](#) (4)
[August 2016](#) (6)
[July 2016](#) (9)
[June 2016](#) (5)
[May 2016](#) (8)
[April 2016](#) (5)
[March 2016](#) (8)
[February 2016](#) (5)
[January 2016](#) (6)
[December 2015](#) (5)
[November 2015](#) (5)
[October 2015](#) (6)
[September 2015](#) (8)
[August 2015](#) (7)
[July 2015](#) (8)
[June 2015](#) (8)
[May 2015](#) (9)
[April 2015](#) (6)
[March 2015](#) (7)

「お兄ちゃん！ 起きて！」
元氣いっぱい甲高い声が、僕の眠りをパチンと覚ます。それと同時に、セミの鳴き声が耳に流れ込んできて、僕は朝の訪れを知る。
接着剤でくっつけたみたいな重い瞼を開けると、視界に広がるのは見慣れた天井ではなく、間近に迫ったカレンの顔だった。頭の後ろから垂れたポニーテールが僕の頬をくすぐる。
「ほらもう六時だよ！ 早く行かなきゃラジオ体操に間に合わないよ〜！」
「分かった分かった……起きるよ。起きるから、ベッドから降りて」
「はい！」
カレンはベッドから飛び降りると、パタパタと駆けて僕の部屋から出て行く。その後ろ姿を見送って僕は起き上がる。勉強机の上に目をやると、夏休みの宿題である算数ドリルの横に、ラジオ体操のスタンプカードが見えた。
小学六年生の僕と四年生のカレンは、夏休みの早朝に行われるラジオ体操に参加すると、お菓子や鉛筆なんかもらえる。カレンはそれが目当てで張り切っているのだ。単に身体を動かしたいだけかもしれないけど。
スタンプカードを手に取り、部屋を出る。
母さんと父さんに「おはよう」をして、洗面所で顔を洗う。朝ごはんをカレンと一緒に済ませると、着替えてから、二人で「行ってきます」と言って家を出た。
外の空気はひんやりしていて気持ちよかった。昼間は鬱陶しく感じる蝉しぐれも、この時間帯はどことなく穏やかに聞こえる。
しばらく国道に沿って進んだあと、道を外れてあぜ道に入った。この先にある神社でラジオ体操は行われる。
「あ！ 見て見て！ ギンヤンマ！」
カレンは一匹の大きなトンボを指差すと、嬉しそうにそれを追いかけ始めた。トンボ一匹で大はしゃぎするカレンが可笑しくて、僕はつい顔が綻ぶ。
そのとき、背後から強い潮風が吹いた。
田んぼが、四角く切り取られた海のように波打つ。みずみずしい稲の葉は、さわさわと音を立てて擦れ合う。僕は無意識のうちに足を止め、目の前の光景に見入っていた。
「お兄ちゃん、どしたの？ 眠い？」
不思議そうに声をかけてきたカレンに、僕は「ううん」と首を振って答える。
「夏休みがずっと続けばいいのにつて、そう思ってさ」
カレンは「そうだね」と言って笑った。
夏休みはもうしばらくある。八月が終わるまで毎日カレンと遊べると思うと、胸が踊った。
――明日は、カレンと何をして遊ぼうかな。
そんなことを思いながら、僕はあぜ道の先に歩を進めた。

――了――

[Tweet](#)

| 2019.07.20 Saturday | - | [23:09](#) | - | - | by [澪](#)



[このページの先頭へ▲](#)

POWERED BY **JUGEM**